

んな風潮を苦々しく思っている作者なのだろう。下句の具体的な場面の表現は、なかなか説得力がある。「思い出いっばい」という幻想に水を浴びせる。鋭い。

虹色のレインコートを脱がされて診察室に鳴いているパグ 鈴木陽美

結句にゆくまで主語が何だかわからない。結句で犬だったんだ、と分かる仕掛け。虹色のレインコートが派手な分だけ、種明かしをされたときの意外性がきわだつ。その意味で趣向の勝った一首だが、ユーモアの味が、趣向が目立つのを制御してくれている。

一時間後にやつてくる汽車を待つホームより見る昼のわたつみ 佐藤博之

分刻みでやつてくる都会の電車で馴れている者には、非日常の時間である。昼の海もまったく次元のちがう海として見えているのだ。去年、家をリフォームした関係で、私は半年間、御殿場から三十分ほどの山荘に住んで、この歌と似た体験をした。次の電車を待つために、駅でぼんやり一時間を過ごす。それまでの日常では見えなかった多くを半年のあいだに見た。

終点に人降りしバス夜の青きシートをうすく発光させ居り 堀 亜紀

ここでの「シート」はバスの座席のようだ。「発光させ居り」とあたかもバスが意志的にシートを発光させている、と見た点が独特。じつさいは街の灯が当たって明るんでいるのだろうが、バスがあたかも自分自身を取り戻したかのように、みずから発光していると見た点が見

どころ。

誕生日ケーキのような花壇あり蜂忙しきホスピスの庭 曲淵江里子

華やかなケーキのような花壇、元気に忙しく飛び回る蜂たち。ごく普通の光景だが、ホスピスの庭という特殊な場所ということが明かされて、不思議な色合いをおびて見えてくる。種明かしを結句までひっぱった技巧。ひんぱんには使えない技巧だが。

机には年末書いたタスクメモ深呼吸して仕事が始まる 中川美和

新年の初仕事。ちよつとだけあらたまった気分ですぐに日常がはじまる、そのわずかな時間をふとクロースアップしてみせた手柄。

人間の形をしている荒れた野が私の前に広がっている 松岡秀明

精神科医として患者を診ている場面だろう。「人間の形をしている荒れた野」というズバリの表現が、なんだかつらいが、的確かつ実感のある表現、と読む。

サイフォンのかろく鳴きぬつ小紋潤いコートの衿たて 他者を寄せざり 峰尾 碧

雁書館時代の小紋潤いスケッチである。コートの衿を立てているのは部屋が寒いからだろう。雁書館の事務所はなんだか寒かった思い出がある。過去の出来事を現在形で表現する追悼歌は、前後の作との関係で、現在形でもかまわない場合もある。この場合は、しかし、結句は「他者を寄せざり」と過去形がよかつたように思う。